

永正二四年（一五二七）、奥州の宗濟を口説き落とした真里谷信勝は、遂に彼を城内に招き入れた。上座に勧められると、宗濟は躊躇なく腰を下ろした。

「古河公方ではもはや関東を統べること叶いませぬ。宗濟様、このうえは何卒遺俗なさり、新しい秩序となられますよう」

真里谷信勝の囁くこの言葉に、いちいち頷きながら、宗濟の胸中は放浪のなかで目撃した、戦乱に疲弊した多くの名もなき民たちの、怨嗟が渦巻いていた。古河公方家の父子対立の折、宗濟は兄・高基に附いた。しかし、どこか一致する考えと異なり、いつしか袂を分かっていた。確かに、このまま古河公方や関東管領が主導権を握っても、関東に暮らす民を潤わせることなど、夢のまた夢であった。

宗濟は幼くして僧籍にいた。鎌倉という世間から隔離された文化と仏門の牢獄にあって、精進料理と禁欲の煩わしさだけの不自由しか知らずに成長した。こうして鎌倉を飛び出して諸国をさすらいること数年、名もない民の苦しさや悲しさ、そして理不尽な死を、直接目のあたりにしてきたのである。

近臣の言葉以外に世の中を知ろうとしない父や兄と違い、宗濟は直接野を歩き、そして視て聴いた。上杉も然り、偏った貴種にありがちな曇り眼のなかにいる。これでは民衆の真実が、見える筈もない。

世の中には、本音と建て前がある。

武士の生活は建前と体面に支えられており、その屋台骨は無辜の民が背負っている。このことを知る者と知らぬ者がいる。古河公方も関東管領も、このことを知らない。そして、宗濟は知っている。

ゆえに真里谷信勝のもとへ身を寄せるうえで、導き出されるその覚悟は、自ずと定めていた。

「我が御所はいずこか」

宗濟は囁くように問うた。さればと、信勝は前置きしてから

「小弓にて」

と大声で返答した。

「小弓は原ずれの城である。あれをくれるというのか？」

「あれこそ御所と呼ぶに相応しいかと」

確かに小弓は上総の拠点としては、よき立地であった。ここに宗濟が腰を下ろせば、原も、千葉も、迂闊には動けなくなるだろう。

真里谷信勝は転がり込んだ錦の御旗を、惚れ惚れと見上げるのであった。

宗濟が真里谷信勝のもとに庇護されたことは、古河公方をはじめ上杉一族にも知れ渡った。当然、千葉氏や原氏そして里見氏にも、である。

既に剃髪を止めていた宗濟は、ここで乱れていた髪を整え、髻を結び直すこと

「右兵衛佐義明」

と、その名を改めた。

そして古河公方父子の争乱とは別の、新たな関東の秩序を宣言し、その盟主になる旨を、近隣に布告したのである。

このことに衝撃を受けたのは、古河公方・足利高基だった。先年、父・政氏から公方職を譲り受けて、これからという矢先の出来事である。久喜の政氏もこのことを知り、大いに嘆いた。

「あれは幼少より激しい気性の子であった。ゆえに将来は足利家の家督に問題を生じるものと考え、早くから鎌倉に預けておいたのだ。還俗と称して古河を訪れてきたあのとき、僕は早く出家に戻って欲しかったからこそ、あの子に冷たく接してきた。なのに、ああ、どうしてこんなことになってしまったのか……ようやく足利公方家の争乱も治まろうかというこのときになつて……親不孝者め、愚か者め！」

激しく虚空へ思いの丈を吐き捨てた。

政氏が諸国へ発した言葉は

「古河の公方こそ正當なる関東公方なり。昨今の偽公方の虚言に惑わされることなかれ」というものである。

さしずめ真里谷信勝を臣下と置いた足利義明にとつて、次に臣従を頼るべき相手は、里見義豊であった。この要請に対する義豊の心中は不

満このうえなかつた。

「なんという理不尽なことやある」

と、このことに對し当初は義豊に應じる態度が皆無であつた。しかし、これに應じるべしと主張したのは、白浜城の里見義通、それに義通の息が掛かる奉行衆であつた。

足利政氏と高基が和解した際、里見義豊は高基支持の立場でありながら軽視されていた。それは義通が政氏支持をしていたためである。

古河公方として、高基は支持を得られなかつたことを根に持つだろう。里見氏は信頼にあたらぬ。きつとそう思っている。

今更尻尾を振ってなんとする。

高基にこだわる義豊の考えは狭い。

例え里見の当主が表向き替つたとしても、義通が隠居していようと、高基は執念深いだろう。

だったら、いつそ小弓の新興勢力との駆引きこそ、里見の立場を明確に置くことが適うに相違ない。

義通の考えは高度な政治的な見地にある。

義豊には、そういう御家のための都合と世間体について、考える頭がない。そのことを、実堯が稲村城に赴き、こんこんと論じた。

「殿はかつて、鎌倉の雪下殿と懇意にされておられましたな」

「たしかに」

「右兵衛佐殿はかつての雪下殿別当、その義理は、重つござります」

里見実堯の言葉に、義豊は忌々しそうに頭を振つた。

「儂が懇意としていたのは文化の交流。このよ
うな立場で懇意になりたいなどは、全く考
えではおらなんだ」

「しかし、そのような屁理屈が罷り通ることは
ございませぬ」

義豊は大きな溜息を吐いた。

「ああ、こんなことになるなら雪下殿とは仲良
くするのではなかつた」

「誰もがそのような打算的になる。だから今の

世は乱れておるのです」

「そのようなこと」

知つたことではない。義豊の言葉は、口に出す以前に、実堯に制された。

「殿は義理を果たさなければなりません」

「義理？」

「そうです。さもなければ、殿の正義は貫け
ませんぞ」

「正義？」

「正義とは不義にならぬための当主の義理。こ
れを守れぬ者からは、在地豪族も心離れてしま
うもの」

実堯の申し様は語尾が強く、義豊はついつい
口籠もつた。

「正義ある当主に人が集う、よくよく覚えて下
さりませ」

「……」

義豊は口を噤んだ。一統ならばこのような
煩いもない。その不自由さを、決して露わにせ
ず噛み締めていた。

このち、真里谷城へは里見実堯と正木通綱
が赴き、足利義明への臣従を口上した。使者と
しては申し分のない二人に、義明は満足そうに
頷いた。

十十十

小弓の嵐 (3)

夢酔 藤山